

2025年度 自己推薦入試【基礎学力型】

国 語

〈全学部全学科共通問題〉

11月3日実施 B日程

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題の冊子を開かないでください。
2. 本冊子には、22ページの問題文があります。
3. 解答用紙は、すべてマーク・シートになっています。
4. 監督者の指示で、受験番号欄に受験票に記載されている受験番号（数字6桁）を縦に記入し、それぞれ右のマーク欄にマークしてください。受験番号が正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。氏名欄に氏名も忘れず記入してください。
5. 解答科目欄には、解答する科目を1つ選び、マークしてください。
6. 解答は、設問の箇所に指示されている解答番号の解答欄にマークしてください。例えば、と指示されている設問に対して、③と解答する場合は、次の例のように解答番号20の解答欄の③にマークしてください。

(例)

| 解答 番号 | 解 答 欄 | | | | | | | | | |
|----------|-------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 20 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ |

7. 解答番号は～です。～の解答欄には何も記入しないでください。
8. マークは、硬度HB以上の鉛筆を使用し、訂正する場合は消しゴムでていねいに消し、消しくずを残さないように注意してください。
9. 解答時間は、60分です。

問題Ⅰ 次の(一)(二)の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、*の付いた語句には、文末に注があります。

(二)

英国においてBSE^{*1}の発生を早期に察知するのに失敗したことはすでに述べた通りである。残念なことではあるものの、一般に新しい病の発見は、容易ではないのもまた事実である。まずもって、病気の症状というものは、しばしば互いに似通っているからである。また、ある程度の数、まとまった症例が出て、それらがなんらかの明確な悪影響を生じさせるものでないと、認識されることはない。それは動物の場合でも、人間の場合でも同じである。

それでも「科学的に正しくデータをとることができれば、正しい結論が出るはずだ」と思われるかもしれない。しかしそもそも、「何のデータをとるか」は、科学的な検討から自動的に決まるものではない。加えて、本質的に科学的認識は、認識する人間の側の「予期」に大きく依存する。たとえば、^{*2}ステント農場のサンプルが見落とされたのは、1という事実を、端的に表しているといえる。

さらに、特にBSEの場合は、科学的に未解明性が高く新しい病気であったため、測定技術自体の開発が遅れたということも付記しておきたい。実際、安価な検査キットが開発されたことにより、BSEが英国以外の国々に広がっていることが、二〇〇〇年頃になってようやく明らかになった。その結果、欧州全体が再びBSEパニックに覆われたのである。

このような新しいリスクの認識に関するさまざまな困難に加え、それが半ば自動的に「2化する」という厄介な側面もある。そもそもリスクの認識自体が、ほとんどの場合、誰かの利害に影響を与えるからだ。したがって、「測ること」が、すぐさま2的な色彩を帯びてしまうのである。

たとえば、二〇〇一年九月、日本にBSEが上陸した際にも、同型の問題が起きていたことを指摘できる。日本でのBSE確認は、欧州以外の自国産牛としては世界初となったわけだが、実は日本政府は事前にEUからその危険性を警告さ

れていた。にもかかわらず、日本政府はそれを「否認」したのである。この件を少し詳しく説明しよう。

当時のEJは、欧州でのBSE拡大を受けて、EJ諸国のみならず、世界各国の国別のBSE危険度を^{*3}アセスメントする事業を開始していた。これは「地理的BSEリスク (GBR)」というが、日本政府もEJに対し、このGBRアセスメントを受けたいと申し出た。ところがその作業の途中で、汚染された^{どろり粉}肉骨粉が輸入されていた可能性が浮上したのである。すると日本の農水省は、「BSEの汚染可能性あり」という結果が出ることを恐れ、このアセスメント作業自体を、途中でキャンセルしてしまったのだ。そんなことをする国は他になかった。

ニューヨークタイムズの取材に対して当時の農水官僚が「不必要な不安を国民に与えないため」と答えている。英国とある意味でそっくりに、日本の行政もBSEのリスクを「あるわけがないもの」と見なし、大きな判断ミスを犯したのである。

しかし一方で、英国でも日本でも同じようなことが起きたということは、単なる担当者の問題などではなく、何か共通する背景があることを意味しているのかもしれない。

ここで一つ指摘できるとすれば、リスクの認識に、専門知の介在が不可欠な時代を私たちが生きている、という点があるだろう。

たとえば「火事」のような従来型のリスクは、おおむね誰が見ても分かるのだが、現代においては、特殊なテクノロジーを用いて、また高度な専門知に基づいて判断しなければ認識できないリスクが、社会問題の原因になることが少なくな^{*4}い。BSEのみならず、COVID-19のウイルスや、放射線、さらには「耐震性の不足した建築物」なども、同種のリスクであることが分かるだろう。

このような、技術的に把握が難しいリスクについて、もしそのリスクが明らかになることを望まない人たちが存在し、かつ、当該リスクの認識を担う専門家が、そのような人たちとなんらかの関わりがある場合、どのような事態が起こりうるか、ちよつと「思考実験」をしてみしてほしい。行政判断の基礎となる科学的な事実の認識自体が歪んでしまったり、それに伴って政策判断もねじ曲げられてしま

うような、そんな危うい事態が目には浮かぶのではないか。

以上のように、リスクの認識は、それ自体が科学と政治が複雑に絡み合った、現代の難問なのだということは、繰り返し強調しておくべきことだろう。

そもそも高度化・複雑化した現代において、専門家の助言なしに行政を遂行することは不可能である。その結果、行政は大きく二つ「内」と「外」の専門家の力を借りることになる。

まず「内」の専門家は、行政機構内部に所属している人たちであり、CVLのブラッドレーやウィルスミスなどがそれに該当する。国の研究所の研究員がどの程度の判断の独立性を持っているかはケースバイケースだろうが、BSE^{*}の場合には専門家が、自らの専門性の範囲を越えて「政治的配慮」をしたために、事態を悪化させた。

そしてもう一つが、審議会のような、外部の専門家の活用である。ここでは特にこの問題について掘り下げて考えてみたい。

サウスウッド委員会^{*}は典型的な審議会である。そこで浮き彫りになった問題の一つは、適切な専門家を誰がどうやって選ぶのか、という点であった。

そもそも、与えられた課題にふさわしい専門家を採るのは、案外難しい。専門性の中味が理解できていないと、誰が適切なのかは判断できないからである。結局、その肝心な作業を担っているのは、どこの国でもおおむね、会議の事務局を担う官僚機構である。そこではどのような基準で人選がなされているのだろうか。

もちろん、課題に対する専門性の「一致度」も考慮はされるだろうが、何よりも、全般的な業績について十分に評価が確立していて、「なぜあんな人が？」などと外部から批判されることのない専門家であることが、事務局としては望ましいはずだ。また、研究活動などの本業に割く時間をある程度は削って、行政に協力して貰う必要がある。一般に若手の研究者は、まだ本業で手一杯であることが多く、その点でも比較的高齢の「大御所」が選ばれ易いとも考えられる。サウスウッド委員会も、そのような人物で構成されていた。

また、審議会では結論を政策に反映させる必要があるので、通常の「真理の探

究」型の学術研究とは違い、一定の期間内で結論を出さなければならない。そこでは学問としての確実性よりも、大ざっぱで良いからはやく方向性を示すことが優先されることもあるだろう。そのようなタイプの業務に忌避感がない人物でなければ、事実上、引き受けてもらうのは難しい。

加えて、公職にふさわしい「バランス」が考慮されることも多いだろう。特定の企業や政治的・思想的勢力の声を代弁するような「専門家」は、明らかに不適切だ。だがこれも厳密に考えると判断は難しい。仮に、偏っていないと思われる人物に委嘱したとしても、それは飽くまで

3

からそう見えた、ということである。また、より原理的な問題として、そもそも何も偏っていない「真っ白な専門家」がこの世に存在するのか、という問題もある。

さらにいえば、行政の人選によって、

4

、ということも実際問題として、否定はできない。当然それが過度になれば、審議会は行政にお墨付きを与えるだけの、権威調達のための「傀儡」ということになってしまうだろう。またそのような専門家が、侮蔑的なニュアンスを込めて「御用学者」と呼ばれることがあるのは、周知の通りである。

しかし「御用」の意味を現代風に説明すれば、「公共的な役割を担うこと」であろう。従って、適切なやり方で研究者がそのような仕事をするには、何も問題はないはずだし、むしろ仕事をしてもらうべきだ。問題は、どうすれば「適切な仕組み」になるのか、ということである。これは古くて新しい難問だと、言わねばなるまい。

とにかく、同じ分野の専門家といっても、実に色々な人がいることだけは忘れてはなるまい。最初に牧場の牛に異常をみつけたビー獣医、CVLのブラッドレー、ウイルスミス、サウスウッド委員会の学者たち、猫のマックスの病気を大した問題ではないと決めつけた政府の主席獣医メルドラム、いずれもが「動物に関する科学的専門家」なのである。どの専門家を選ぶかで、私たちの未来が変わってしまう——、これは、決して誇張ではないのだ。

(神里達博「リスク時代における行政と専門家」)

- [注] * 1 B S E……B S Eとは、Bovine Spongiform Encephalopathy (「Bovine＝牛」
「Spongiform＝海綿状」、 「Encephalopathy＝脳疾患」) の略。正式な病名は、「牛
海綿状脳症」で、いわゆる「狂牛病」のこと。一九八六年に、イギリスで初めて確
認された牛の疾病であり、脳細胞が変性を起こして海綿状となることから、この名
称で呼ばれ、また、牛が歩行困難になったり、奇声を発したりするなどの神経症状
を示して死に至ることから、「狂牛病」とも呼ばれている。二〇〇一年には、日本に
も上陸し、大きな社会問題となった。
- * 2 ステント農場のサンプルが見落とされた……一九八四年二月に、イギリスのウェ
スト・サセックス州の農場で、牛が身体を弓なりに反らせるなど、おかしい動きを
繰り返した。農場主のステント氏は、地元の獣医デービッド・ビーに相談し、薬を
投与したが症状は改善せず、ついには四肢がまともに動かなくなり、翌一九八六年
二月に、その牛は死亡した。その後もこの農場では同様の症状の牛が現れたため、
ビー獣医は、四肢の麻痺などは神経症状であることを疑い、死亡した牛の脳の検体を、
国の研究機関である中央獣医学研究所(CVL)に送った。しかし、CVLにおいて、
この検体が深刻に受け止められることはなく、この時点では、BSEが新しい病気
として初めて察知されることはなかった。そのため、現在では、このステント農場
の事例は、「幻のBSE第一号症例」と呼ばれている。
- * 3 アセスメント……調査して、評価すること。
- * 4 COVID-19のウイルス……新型コロナウイルスのこと。
- * 5 CVLのブラッドレーやウイルスミス……ブラッドレーは、CVLの病理学部長で、
当時、ケント州のマナー牧場で発生した、ウェスト・サセックス州と同様の症状の
牛の検体について、「海綿状脳症」が牛において発生した可能性に初めて気づいた人
物。ウイルスミスは、CVLの疫学部長で、当時、疫学調査によって、牛の症状の
原因が「肉骨粉」という飼料であることを初めて解明した人物。
- * 6 BSEの場合は専門家が、自らの専門性の範囲を越えて「政治的配慮」をしたため
に、事態を悪化させた。……CVLのブラッドレーは、「海綿状脳症」が牛において
発生した可能性に初めて気づいたけれども、「牛の輸出に深刻な影響が出るし、おそ
らく人間にとっても深刻な影響があるだろう」と考えて、この件に関する文書を機
密扱いとした。そのため、彼はこの病気を隠蔽したのだと指摘されている。また、
一九八七年三月には、CVLの研究者が、この件についてニュースレターを発行し
ようとしたが、CVLの上層部から圧力があり、発行は差し止めになった。なお、
正式な論文でBSEの発生が公表されたのは、ブラッドレーがその可能性を認識し
てから一年近く経った、一九八七年一月三日発行の「獣医学雑誌」においてであ
った。そのため、結局のところ、CVLの上層部は、政権に対して、いわゆる「忖度」
＝「政治的配慮」をしたのだと指摘されている。
- * 7 サウスウッド委員会……イギリスでは、一九八七年末頃になると、こうした牛の症
例報告は、急速に増えていき、政府も対応を余儀なくされた。そこで、イギリスの
農業漁業食糧省は、オックスフォード大学の動物学者サウスウッド教授をトップと

する「BSE作業部会」、通称「サウスウッド委員会」を設置して、BSE問題への対処方法を検討させることにした。その最初の会合は、一九八八年六月に開かれた。

* 8 傀儡……人の手先となって、思いのままに使われる者。あやつり人形。

* 9 猫のマックスの病気を大した問題ではないと決めつけた政府の首席獣医メルドラム……当時、イギリスのブリストルで飼われていたシャム猫の「マックス」が「狂猫病」にかかったと、タブロイド紙が報じた。この猫は、一九八九年の末頃から、歩行困難などの神経症状が出て、症状は悪化の一途をたどった。飼い主はブリストル大学獣医学部に連れて行ったが、治療の見込みはないと判断されて、飼い主の許可を得た上で、猫は安楽死させられた。そして、その死後に病理検査を行ったところ、伝達性の「海綿状脳症」の徴候が見つかった。そのため、牛から猫にうつるなら、人間にもうつるだろうと考えた多くの人々は、パニック状態になった。しかし、農業漁業食糧省の首席獣医官であったキース・メルドラムは、テレビに出演して、「イギリスの七〇〇万頭の猫のうち、一頭が死んだというだけですから、心配する理由は全くありません」と発言して、パニック状態に対して、火に油を注ぐことになった。

問一 空欄 に入る文として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 専門家であっても、「あるわけがないと思っているもの」の認識は非常に難しい
- ② 専門家であっても、「あるわけがないと思っているもの」の認識は不可能である
- ③ 優れた専門家でなければ、「あるわけがないと思っているもの」は認識できない
- ④ 全ての専門家は「あるわけがないと思っているもの」であっても、認識できなければならない

問二 空欄 に入る語句として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 事件
- ② 政治
- ③ 社会問題
- ④ 国際問題

問三 空欄 3 に入る語句として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 3
- ① 事務局担当者の視点
 - ② 比較的高齢の「大御所」の専門家の視点
 - ③ 一定の期間内で結論を出してくれる専門家の視点
 - ④ 特定の企業や政治的・思想的勢力の意見を代弁する専門家の視点

問四 空欄 4 に入る文として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 4
- ① 審議会の議論が内部で激しく対立してしまう
 - ② 審議会で「大御所」の影響力が大きくなってしまう
 - ③ 審議会と行政が激しく対立することが確実視されてしまう
 - ④ 事前に審議会の結論をある程度コントロールできてしまう

問五 本文の内容と一致するものを、次の①～④の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 5
- ① 現代においては、特殊なテクノロジーを用いて、また高度な専門知に基づいて判断しなければ認識できないリスクが、社会問題の原因になることが少なくないから、リスクの認識に、専門知の介在が不可欠な時代を私たちが生きているといえる。
 - ② 技術的に把握が難しいリスクについて、そのリスクが明らかになることを望まない人たちと、当該リスクの認識を担う専門家たちは結託して、行政判断の基礎となる科学的な事実の認識自体を歪めることを常に狙っていることを認識すべきである。
 - ③ 「科学的に正しくデータをとることができれば、正しい結論が出るはずだ」と考えられやすい。しかし、本質的に科学的認識は、認識する人間の側の「予期」に大きく依存するから、「何のデータをとるか」は、科学者の経験知に左右されてしまうことが問題である。

- ④ 技術的に把握が難しいリスクについて、もしそのリスクが明らかになることを望まない人たちが存在し、かつ、当該リスクの認識を担う専門家が、そのような人たちとなんらかの関わりがある事例は好ましいものではないので、そうならないように事前に対応すべきである。

(二)

科学史・科学哲学という学問の性格上もあって、純粹の歴史研究者や哲学の研究者（つまり、人文学系統の先生方）を非常勤講師にお願いすることが多い。例えば、中世イスラム世界の研究者や、フツサル哲学の専門家などをお招きするわけである。そうした先生方でも、当然履歴書の他に「業績リスト」が必要である。そこで、それを書類にして委員会に提出することになる。

しかし、その種の「業績リスト」に掲げられている「論文」の発表媒体は、例えば岩波書店から刊行されている『思想』とか、あるいは青土社から発行されている『現代思想』など、つまり言い換えれば一般の商業誌であることがしばしばである。むしろ、人文系の場合には、よい仕事をしている研究者ほど、そういう媒体に「論文」を載せる機会が多くなるとさえ言えるかもしれない。ところが、それを讀んだ委員会のメンバーの誰か（例えば物理専攻の先生や化学専攻の先生）が、お訊ねになる。〃この何某先生の「業績リスト」に載っている何某という「論文」は『現代思想』に発表されたものですね？。私は当然答える。〃そのようですね。すると、重ねて次のような下問がある。〃で、この雑誌にはレフェリー制度はあるんでしょうか？。

最初のうち、私は、これは純粹に質問だと思った。したがって、レフェリー制度が設けられているわけではないが、投稿論文で掲載したいようなものがあつた場合には、外部の誰かに掲載してよいかどうかの判断を訊ねることはあるので、実質上レフェリーの機能が働いている場合はあるというように、真面目に答えていた。しかし、余り度重なるので、鈍い私もやがて気が付いた。これは、質問ではなくて、嫌がらせの儀式なのだということに。というのも、あるとき、質問し

た先生が、「それでは、あなた方の分野では、」
。という念押しがあったからだ。私の「鈍感さ」を悟らせてやろうという有り難い親切心だったに違いない。

つまり、問題の核心はここにある。少なくとも自然科学系の分野では、「論文」とはレフェリー制度を備えた媒体に掲載されたものでなければ、そう呼ばれる資格がないのである。レフェリー制度、これが、専門学会がここ一〇〇年の間に備え付けた、科学における研究活動にとって重要、不可欠な装置の一つである。

すでに述べたように、専門学会は、ほとんど必ず、その学会に属するメンバーが自分の研究成果、すなわち研究論文を発表するための媒体として、機関誌(ジャーナル)を持っている。さらには、前章で述べたような、国家を母体とした振興協会や、その他の機関がジャーナルを持っている場合もある。しかし、言うまでもないが、そこに投稿された論文原稿のすべてが、必ず機関誌に掲載されるわけではない。そこには装置が働いている。そのを行う装置がレフェリー制度である。

具体的にはこうなる。あなたが掲載を希望する論文原稿をもっていたとしよう。あなたは機関誌の編集部に、それを送る。受け取った編集部では、内容にざっと目を通して、二人のレフェリーを決め、あなたの原稿のコピーを彼らに送付する。多くの場合に、審査用紙が付いていて、レフェリーは自分の審査結果をその用紙に書き込むようになっている。掲載可か、不可か、あるいは可であっても、内容や表現を変える(削除する、あるいは付け加える)べきであると思われるところがあるかないか。もし、その機関誌が日本語以外の言語を使用しており、あなたの原稿も外国語で書かれていたとすると、その言語表現は十分か、というような審査項目が別につけられていることもある。こうして、レフェリーは、自分の審査結果を編集部に通知する。ちなみに、こうした場合、投稿者つまりあなたには、誰が自分の論文に対するレフェリーの役割を果たしているのかは、伏せることになっている。念のために言うと、厳密にやろうとすれば、レフェリーに送られた論文の著者名も、レフェリーに対しては伏せることになる。つまり、そ

の論文をあなたが書いたということは、レフェリーは知らないままに、審査を行うことにもなる。

レフェリーの審査結果が返ってきた段階で、二人のレフェリーの判断が双方とも、無条件に掲載可ならば、あなたの論文は、印刷に回されるべき論文のウェイティング・リストの最後尾に置かれることになる。無論、無条件に掲載不可の場合は、あなたの原稿は直ちにあなたの手許に返送されてくるだろう。条件が付いている場合には、そのレフェリーの審査結果が（誰による審査かはあなたに知らされないまま）あなたに伝えられ、求められているような書き換えや削除や追加をあなたが認めるかどうかを訊ねられるだろう。あなたは、その要求に応じるか、さもなければ、掲載されることを諦めるか、どちらかを選ぶことになる。

ところで、レフェリーが自分の手許に送られて来た投稿原稿の審査をするときの基準は一体何なのだろうか。基本的には、まさにそこに前章の最後で触れたサムシング・ニューイズム《something new-ism》と呼ばれるものが働くことになる。

専門家集団には、それ独特の知識体《a body of knowledge》とでも言うべきものがある。それは、その領域に特有の設備や実験装置を通して得られた知識の総体であり、しかも、そうした知識体は、そうした装置や設備をどのように使って、どのような手続きに従ってデータを手に入れるか、というような、データや知識を組み上げていくに際して必要なセッティングについても、その専門家集団に固有で共通の暗黙の了解と、それに基づく蓄積とが前提されてはじめて成立するものである。

その領域の「専門家」であるということは、そうした暗黙の了解やセッティングを熟知しているということであり、またその前提に立った上で、自分たちの集団が共有している知識体の全貌が何であるかを熟知しているということの意味している。だからこそ、そのようなセッティングの上に立って、論文のなかに盛り込まれた内容が「サムシング・ニュー」であるかないかを判断できるのは「専門家」だけになるのである。

その前提的基盤の上に立って、レフェリーは、その領域の専門家として、投稿された論文原稿の審査に当たることになる。すでにはつきりしているように、その際、その内容が、自分たちの共有し、共通財産として所有している知識体に対して、「何か新しいもの」《something new》を付け加えるかどうか、が最も重要な審査の判断基準として置かれるのである。その論文の内容が、過去にすでに誰かが報告したり主張していたことであり、つまりは、3であれば、これは、発表する意味は全くないと言わなければならない。そのとき、その論文は当然のこととして掲載を拒否されて、著者に差し戻される。

しかし掲載を拒否されて、著者に原稿が差し戻されるのは、こうした「二番煎じ」である場合だけではない。その前に、その専門家の共同体の共有する知識体と、その前提としてある研究のためのセッティングとを踏まえていない、言い換えれば、専門家の共同体の敷いた路線から、さまざまな意味で外れているような内容を持った論文原稿は、それだけで拒否の対象となる。

いわゆる素人、非専門家が、たまたまある領域に関して、新しい発見をしたと信じたとしよう。その人が、その「新発見」を論文に仕立てて投稿したとしても、その領域の専門家の共同体のレフェリーは、仮令その「新発見」が、確かに彼らの共有財産である知識体に「新しい何か」を付け加えるものであったとしても、恐らくは、最初から、その論文を拒否する公算が高い。その理由は、論文の「書き方」という、ある意味では形式的な問題にある。専門家は、そういう論文を書くときに、何は書かなくてはならないか、何は書いてもよいか、何は書かない方がよいか、何は書いてはならないか、を知っている。というよりは、それを知っている人のことを、現在では「専門家」と呼ぶのである。そのノウハウは、上に広く「セッティング」という大まかな言葉で網掛けをした多くの事柄と関わるものである。非専門家の書いた「論文」が、専門家の目に、一目でどこか4ものとして映るのは、まさしくその点である。そして、その「4」という感賞は、その投稿論文を拒否する立派な理由になる。ほとんど例外なく、そうした原稿は、いわゆる「門前払い」という処置を受けるだろう。

このような事態は、いわゆる「素人」と専門家の間でのみ起こるわけではない。研究者として、すでに多くの「業績」を挙げているある領域の専門家が、別の領域で論文を書こうとしたときにも、まま起こることなのである。一つの領域での専門家であることが、そのまま、それとは違った領域で共有されている知識体とそれを支える諸々のセッティングについて、十分な知識と経験があることを保証しないからである。他の領域で名のある研究者を無下に「門前払い」にすることに躊躇^{ちゆうず}があることもあろう。その場合には、一つの決まり文句が用意されている。「貴論文はこのジャーナルの編集方針からやはずれております。別のジャーナルに投稿されることをお勧めいたします」という具合である。実際にある分野で著名な研究者の論文（正確には未だ「論文」にはなっていないのだが）が、このような形でたらい回しにされた揚げ句、結局最初のジャーナルに戻って来たという実話もある。

（村上陽一郎『科学者とは何か』）

問一 空欄 1 に入る文として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 6
- ① レフェリー制度を否定する研究者が書いたものでも、「論文」とお認めになるのですね
 - ② レフェリー制度がないような媒体に発表されたものでも、「論文」とお認めになるのですね
 - ③ 商業誌に論文を書いて、お金儲けをすることしか頭にない研究者でも、「非常勤講師」とお認めになるのですね
 - ④ 商業誌に論文を書いて、名前を売って有名になることしか頭にない研究者でも、「非常勤講師」とお認めになるのですね

問二 空欄 2 に入る語句として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 7
- ① 修正
 - ② 推薦

- ③ 選択
- ④ 批判

問三 空欄 に入る文として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 自分たちの共有財産としてもっている知識体を否定するもの
- ② 自分たちの共有財産としてもっている知識体を補強するもの
- ③ すでに自分たちの共有財産としてもっている知識体から否定されてしまっているもの
- ④ すでに自分たちの共有財産としてもっている知識体のなかに含まれてしまっているもの

問四 空欄 に入る語句として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 挑発的な
- ② 批判的な
- ③ 馴染まない
- ④ 超越している

問五 本文の内容と一致するものを、次の①～④の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 少なくとも自然科学系の分野では、「論文」とはレフェリー制度を備えた媒体に掲載されたものでなければ、そう呼ばれる資格がなくなつたから、レフェリー制度は、専門学会がここ一〇〇年の間に備え付けた、科学における研究活動の大きな成果の一つであると高く評価できる。
- ② 専門家の共同体の共有する知識体と、その前提としてある研究のためのセッティングとを踏まえていない、言い換えれば、専門家の共

同体の敷いた路線から、さまざまな意味で外れているような内容を持った論文原稿を書いてしまうことが、いわゆる素人、非専門家と見なされてしまう最大の欠点である。

- ③ 研究者として、すでに多くの「業績」を挙げているある領域の専門家が、別の領域で論文を書こうとしたときには、一つの領域での専門家であることが、それとは違った領域で共有されている知識体とそれを支える諸々のセッティングについても、十分な知識と経験がある人と同等の力を発揮することにつながる。
- ④ 専門家集団には、それ独特の知識体とでも言うべきものがある。しかも、それは、データや知識を組み上げていくに際して必要なセッティングについても、その専門家集団に固有で共通の暗黙の了解と、それに基づく蓄積とが前提とされることによって、はじめて成立するものである。

問題Ⅱ 次の各問いについて、その解答を選択肢の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。

問一 次の慣用句の意味として、最も適切なものはどれですか。

- 11 首をかしげる
- ① 疑問に思う
 - ② 深入りする
 - ③ 命がけで物事に取り組む
 - ④ 期待して待ち焦がれる

問二 次の慣用的表現のうち、適切でないものはどれですか。

- 12
- ① その仕事は私の手にあまる。
 - ② 明日の天気は雨模様だそうだ。
 - ③ 車にぶつかりそうになって肝を冷やした。
 - ④ 彼は人の話の揚げ足をすくってばかりいる。

問三 次の傍線部の外来語の意味として、最も適切なものはどれですか。

- 13 働き方改革をうけて、組織のガバナンスを強化する。
- ① 関与 ② 合意
 - ③ 指針 ④ 統制

問四 次の【 】内のようなとき、の部分に入る最も適切な表現を、後の①～④の中から一つ選び、番号で答えなさい。

【生徒が校長室に行った際、誰からの指示で来たのか校長に尋ねられたとき】

- 14 阿部先生が 。
- ① おっしゃったので、参りました
 - ② 言われたので、お出でになりました

- ③ 申しましたので、お伺いたしました
- ④ ご連絡なされたので、ご訪問されました

問五 次のカタカナの熟語の表記として、最も適切なものはどれですか。

- 15 この提案については、問題点を考えてサイコウする必要がある。
- ① 再行
 - ② 再考
 - ③ 再攻
 - ④ 再構

問六 次の熟語のうち、二字ともに音読みでないものはどれですか。

- 16
- ① 残酷
 - ② 残暑
 - ③ 残高
 - ④ 残余

問七 次の熟語のうち、上と下の漢字が示す意味の関係が異なるものはどれですか。

- 17
- ① 陰気
 - ② 語気
 - ③ 天気
 - ④ 排気

問題Ⅲ 次の(一)(二)の、各ア～オは順不同に並んでいます。論旨の通る最も適切な順序を、後の①～④の中から一つ選び、番号で答えなさい。

(二)

ア 心理学で劣等感という概念を初めて提唱したのはオーストリアの心理学者アドラー(一八七〇～一九三七)である。

彼は、劣等感とは、ひとつの完成された自分を作り上げるためのプロセスで現われる、自分自身が足りないと感じる部分、といった意味で定義づけている。

イ 語学の能力がない、という劣等感を持っている人は、それを補うことでより大きな自分になる。持続力も、運動能力も同じである。

ということは、劣等感をたくさん抱えている人は、もっともっと大きな人間になれる可能性がある、ということだ。萎縮することは何もない。

ウ 「オレは劣等感の塊だ、どうしようもない」と、仕事のあと、会社の近所でお酒を飲みながら、同僚に話をする。ドラマでよく見たことのあるようなシーンである。

あなたにも、いくつかが、劣等感を感じている、何かがないであろうか。

「どうしても語学が習得できない。私は語学の能力が決定的に欠如しているのではなからうか」「僕は集中力がないんだよ。企画書を作っても、一〇分もたないんだ」「私は、運動がダメ。同僚とボウリングに行くときなんて、恥ずかしくって仕方ない」

誰もが、何か劣等感を持っている。「あ、ダメだな、自分は」という気持ち。

エ ではここで、劣等感について改めて考えてみたい。

一般的に劣等感とは、人と比べて劣っている部分、といった意味で使われる。しかし、心理学では少し違う。

オ つまり、人と比べるのではなく、自分の中で足りない部分であり、さらにそれを補うことによって、より大きな自分になるのである。

いかがであろうか。これまで劣等感というと、マイナスのイメージばかりを抱いていたのではなかろうか。しかし心理学においては、劣等感は、単純にマイナスではない。自分をもっと大きなプラスにするためのマイナスなのだ。

(齊藤勇『自分を棚にあげて平気でものを言う人』)

18

- ① ア ↓ ウ ↓ イ ↓ エ ↓ オ
- ② ア ↓ エ ↓ ウ ↓ イ ↓ オ
- ③ ウ ↓ エ ↓ ア ↓ オ ↓ イ
- ④ ウ ↓ イ ↓ ア ↓ エ ↓ オ

(二)

著作権処理の都合により掲載できません

- ① ア → イ → オ → ウ → エ
 ② ア → エ → イ → オ → ウ
 ③ エ → ア → ウ → オ → イ
 ④ エ → オ → イ → ウ → ア

引用元：(ビートたけし『間抜けの構造』)

著作権処理の都合により掲載できません

問題Ⅳ 次の各問いについて、その解答を選択肢の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。

問一 次はある作品の冒頭です。この作品はどれですか。

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人と栖まよと、またかくのごとし。

- 20 ① 徒然草 ② 枕草子 ③ 方丈記 ④ 平家物語

問二 次の作品名と成立の時代の組み合わせのうち、正しくないものはどれですか。

- 21 ① おらが春―江戸時代 ② 伊勢物語―平安時代
③ 蜻蛉日記―鎌倉時代 ④ 宇治拾遺物語―鎌倉時代

問三 次はある作品の冒頭です。この作品の作者は誰ですか。

山の手線の電車で跳ね飛ばされて怪我をした、其後養生あひまひやうじやうに、一人で但馬の城崎温泉へ出掛けた。背中の傷が脊椎せきついカリエスになれば致命傷になりかねないが、そんな事はあるまいと医者い者に云われた。

- 22 ① 志賀直哉 ② 島崎藤村 ③ 武者小路実篤 ④ 田山花袋

問四 次の作品のうち、川端康成の作品でないものはどれですか。

- 23 ① 伊豆の踊子 ② 雪国 ③ 古都 ④ 潮騒

問五 次の作品とその舞台の組み合わせのうち、正しくないものはどれですか。

- 24 ① 檸檬―京都 ② 舞姫―ベルリン
③ 坊ちゃん―松山 ④ 風立ちぬ―高山

問題Ⅴ 次の各問について、その解答を選択肢の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。

問一 次のA～Dの各群の①～④のうち、傍線部の漢字の読みが適切でないものはどれですか。

- 25 A
- ① 仏教が**伝播**(でんぱ)した歴史を学ぶ。
 - ② 仏教に**帰依**(きい)して極楽往生を願う。
 - ③ 使い古された**陳腐**(ちんぷ)な表現しかできない。
 - ④ 法令を**遵守**(じゆんしゆ)する。
- 26 B
- ① 議長の判断に**委**(ゆだ)ねる。
 - ② 研究に**真摯**(しんし)に取り組む。
 - ③ 彼は**稀有**(きう)な才能の持ち主だ。
 - ④ 伝統が現代に**蘇**(よみがえ)る。
- 27 C
- ① 狭いすき間にゴキブリが**潜**(ひそ)む。
 - ② コミュニケーションに**齟齬**(かご)を来す。
 - ③ 彼は**著**(いちじる)しい成長をみせた。
 - ④ 彼と彼女は**些細**(ささい)なことで喧嘩をした。
- 28 D
- ① 暑い日が**暫**(しばら)く続くだろう。
 - ② 政治の力で、歴史が**歪曲**(わいきよく)された。
 - ③ 彼は人格が**破綻**(はじよう)している。
 - ④ この小説は、人物描写が**精緻**(せいち)だ。

問二 次のア～エの傍線部と同じ漢字を含むものはどれですか。

- 29 ア コンサートのチケットが当選して、気分が**コウヨウ**する。
- ① 仕事の**コウリツ**だけを重視するのは良くない。
 - ② この知事は**コウヤク**を一つも実現していない。
 - ③ **コウマン**な態度は嫌われる。
 - ④ 彼女に**コウサイ**を申し込んだが、拒否された。

30

イ コンサートのヨインにひたる。

- ① 多忙のため、時間的にヨエウがない。
- ② 浪費したため、ヨキンの残高が少なくなった。
- ③ 彼のメイヨが傷つけられた。
- ④ 事態がどう展開するかをヨケンすることは難しい。

31

ウ 憧れの女優の年齢サシヨウを知って幻滅した。

- ① カメラには、メーカー純正品の電池の使用をスイシヨウする。
- ② このカメラの新しい機能は、シヨウゲキ的なものだ。
- ③ 彼はジシヨウ写真家だが、写真は下手だと言われている。
- ④ アイドルのライブに熱狂して、体力をシヨウモウした。

32

エ 応援していた芸能人が引退したので、生活がクウキヨになった。

- ① 彼は常にキヨドウ不審である。
- ② 彼はキヨギの発言が多い。
- ③ 彼はトラブルを起こして、店からタイキヨさせられた。
- ④ 彼の言うことには、コンキヨがないことが多い。

